

仁戸名の始まり

仁戸名養護学校前史(H19.4.1より仁戸名特別支援学校)

仁戸名養護学校は昭和52年に創立されましたが、そこに至るまでに長い道のりがありました。今から40年くらい前の昭和40年代までは、慢性疾患をかかえる子供たちは学校を長期欠席することがほとんどで、かりに登校しても、体に大きな負担をかけてしまう場合もありました。これに心を痛めていた文部省(現文部科学省)の加藤安雄先生は、昭和45年に千葉市立新宿小学校を指定して「医療機関や家庭で病気の療養をしていて、学校を長く欠席している子どもの研究」を依頼しました。新宿小は国立千葉病院に臨時の分教室を設けて研究が始められました。

これは今まで病気で学校に登校するのが難しかった子どもや保護者らに非常に喜ばれ、千葉病院小児科の患者が急増するという事態が起きました。その事態を受けて、ベッド数の確保とともに、入院療養しながらでも教育を受けられる病弱教育を専門に行う機関を熱望する動きが、保護者を中心に見られるようになりました。病気の子を抱える保護者達はお医者さんと一緒になって、陳情書・趣意書・署名などで根気よく千葉県や千葉市に請願を出し、臨時ではない正式な新宿小の病院内学級が認められました。

この時、千葉病院小児科に入院していた子ども達のうち、腎疾患を抱える子どもは国立千葉東病院に移ることになりました。そのため千葉東病院にも院内学級が作られることになり、その規模も年ごとに拡大していったので、先生もいくつかの学校から派遣されるようになりました。昭和49年には千葉市立川戸小学校から先生が1人来て小・中学生11人を2つの教室で教えるようになりました。昭和50年には小・中学生合わせて23人もの子どもが院内学級で学ぶようになり、千葉市立松ヶ丘小学校から3人、松ヶ丘中学校から1人の先生が派遣されて指導にあたりました。昭和51年には松ヶ丘小から3人、松ヶ丘中から2人の先生が来て小・中学生28人を教えました。

院内学級ができて学習が行われるようになると、子ども達は生き生きとするようになり、生活のリズムも確立されて、治療にもよい影響が見られるようになってきました。病院の指導員さんはいっしょに運動会や文化祭をやって、子ども達の学校(院内学級)生活を盛り上げてくださるなどしてくれました。当時の千葉東病院長だった金子先生も始業式や終業式で積極的に校長先生の代わりを務めてくださるなどしてこの院内学級運営を手助けしてくれました。またこの時期、疾患を抱える子どもに対する医療費を補助する制度ができあがり、積極的に治療に専念する子どもが増えるようになって、子ども達の入院が短くて1年、長いと6年と長期化し、ますます病弱教育の必要性が叫ばれるようになってきました。その声を受けて金子先生の後任の森院長先生、主治医の倉山先生(現千葉東病院副院長)といった人たちが、この院内学級を本格的な病弱教育の場として養護学校にしなければ、と尽力され、ついに昭和52年9月6日千葉県立仁戸名養護学校創立にいたったのでした。



国立療養所千葉東病院の旧館
を借りました。

校章デザインの由来

昭和53年4月6日1学期の始業式に校章を発表しました。十字は病弱養護学校と関係が深い医療、ペン先は学問を表し、療養しながら学べる学校としての特色を表わしています。

初代校長 久保田勉氏の発案により十字にペン先、仁戸名の「仁」、養護学校の「養」を組み合わせたもので、美術担当教員がデザインしたものです。

